

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ボルヘスの初期短編：隠された意図

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2006-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 榮一, Kimura, Eiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/655

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ボルヘスの初期短編——隠された意図

木村 榮 一

一九三五年に出版されたボルヘスの短編集『汚辱の世界史』⁽¹⁾は、雑誌《クリティカ》に掲載された短編にいくつか新しい作品を加えて一冊にしたものである。ここにはラザルス・モレル、トム・カストロ、鄭夫人、預言者ハキムなど奴隷売買、殺人、詐欺、海賊行為、反乱の扇動といった悪行、非行によって歴史に名を残している人物たちの簡潔な伝記をつづった作品、あるいは『千夜一夜物語』やスウェーデンボリの著作からの抜粋、ブエノスアイレスのならず者の世界を描いた短編「ばら色の街角の男」などが収められている。

この短編集はボルヘスの初期の、それも習作的な作品と見なされていて、あまり取り上げられることはない。ただ、以前この作品を読んだ時に、気にかかる箇所が二つばかりあった。ひとつは一九五四年版に付け加えられた「序」の一節で、もうひとつは末尾の「文献資料」である。序については後で触れるとして、先に「文献資料」を見ていくと、そこにはマーク・トウェインの『ミシシッピーでの生活』（一八八三）、『ブリタニカ百科辞典』（一九一〇年版）、パーシー・サイクスの『ペルシアの歴史』（一九一五）などさまざまな著作が列挙されているが、中にはボルヘスの捏造した架空のものも含まれている。作者がなぜこのような「文献資料」というページを立てたのか、その理由は明確ではない。「ばら色の街角の男」をのぞいて、それぞれの短編には種本があると、読者に伝えたかったのかもしれない。しかし、この作品を読んだ後、「文献資料」に目を通して、外国から原書を取り寄せ

て読み比べるような奇特的な読者はまずいないだろうし、作者の狙いもそのようなどころになかったはずである。しかも、初版を出してから二十年後に、「それらは、自ら物語を書く勇気がないために、他人の物語を（何ら美学上の正当な理由もなく）偽造し^{わいきよく}歪曲して楽しんでいた、小心な若者の無責任な手すさびである」と語っている。つまり、あの「文献資料」は参考にはしたけれども、好きに書き換えさせてもらったと宣言しているわけだから、何ともふざけた話である。いや、これは創作だから、種本を明かしても問題はないし、それをもとに想像力を働かせて書き換えてどこが悪い、といえはそれまでだが、真面目な批評家、あるいは読者がここを読み、「偽造、歪曲」という言葉に過剰反応すれば、一九五四年版の「序」でこのようなことを言ったということは、作者が二十年間読者を欺き続けたということではないかと、怒り狂ったとしてもおかしくない。

しかし、ボルヘスの作品は当時そういう心配をする必要がないほど売れなかった。ジョルジュ・シャルボニエとの対談⁽²⁾で、彼は『汚辱の世界史』に触れて、この作品は一年間でわずか三十七部しか売れなかったと語っている。つまり、あの短編集を買った人たちというのは大半がボルヘスと親しい人か、顔見知りだったはずで、だからこそこのような遊び、おふざけが可能だったのだ。

短編「アル・ムターシムを求めて」を見ても分かるように、架空の書物を考え出して、さも読んだかのようにそれについてまことしやかに語るという離れ業をやっているボルヘスが、作品の末尾に「文献資料」をつけて、実はこの本には種本がありまして、と種明かしをすることは考えられない。このような遊びの背後には、何らかの意図が隠されているはずである。アルゼンチンの作家アドルフォ・ビオイ＝カサーレスはあるエッセイで次のように述べている。

トレーンの哲学者たちのように、ボルヘスは形而上学の持つ文学的可能性

を見出した。読者はおそらく、ボルヘスもやはりライブニッツ、コンディヤック、ヒュームの著作のうちにそうした可能性が秘められていると感じて、ひどく感激したことがあるのを覚えておられるだろう。けれども、あいもかわらず文学は単純な現実にとっぴりひたっている読者に向けて書き続けられていて、もっぱら行動と情熱からなる共有の世界を増殖させることに腐心している。しかし、さまざまな必要性というのは、そうした必要性を満たすものが現れてはじめて、それまでを振り返って、ああ、これが必要だったのだと思ひ当たるものなのだ。「八岐の園」は本来の文学と思索が生み出す新しい文学の必要性を作り出し、それを満たしてくれる作品である⁽³⁾。

ボルヘスが短編作家として劇的な変身を遂げるのは、一九三八年に発表した『『ドン・キホーテ』の作者ピエール・メナール』以降のことである。先に引用したビオイ＝カサーレスのエッセイは「八岐の園」を取り上げたもので、一九四二年に雑誌《スル》に掲載された。したがって、『汚辱の世界史』は、ビオイ＝カサーレスが、「形而上学の持つ文学的可能性」をボルヘスが見出したと指摘するよりも七年前の作品ということになる。ぼくがこの引用で、なるほどと思ったのは、「あいもかわらず文学は単純な現実にとっぴりひたっている読者に向けて書き続けられていて……」という一節で、ビオイ＝カサーレスがリアリズムを基調とした小説に対して批判的な考え方をしていることがここからうかがえるし、ボルヘスも同じ立場に立っていたことは間違いない。前衛主義の洗礼を受けたボルヘスが、やがてそれに限界を感じるようになり、『汚辱の世界史』を執筆していた頃は自分の進むべき道を模索していた。そんな中、ある意味では弟子であり、年下の親しい友人でもあったアドルフォ・ビオイ＝カサーレスとしょっちゅう顔を合わせて文学談義を戦わせていた。ビオイ＝カサーレスの『モレルの発明』(1940)、『脱獄計画』(1945)はそうした中から生まれてきた小説であり、この二作は共に巧緻を極めたプロットと一見写実的に見えて、その実とらえどころのない特異な文

体によって幻想的な文学空間を創出するのに成功している。

言うまでもなく、ボルヘスも当時のアルゼンチンの文壇で強い影響力を備えていた十九世紀的なリアリズムを基調とする作品に批判的な態度をとっていた。ただ、それを文学論やエッセイではなく、実作でどう表現するかが大きな課題だった。彼はそれを『汚辱の世界史』で試みた。実在した人物たちの伝記を極度に圧縮した文体で語り、さらに「文献資料」をつけることによって、ひとつひとつの作品が歴史的、伝記的な文献、資料に基づいて書かれたものだと暗示して、いかにもリアリズムの規範に従っているかのようなポーズを取っている。彼はしかし、モーパッサン、ドーズ、あるいはアナトール・フランス、ディケンズといった十九世紀小説の師表ともいえる作家たちを手本にして、都会に生きる小市民や社交界の人々、地方都市の住民、農民の姿といったものを、鋭い現実観察と洗練された文体で描き出すことによって、生きる喜びや悲しみ、人間の優しさ、愚かしさ、残酷さ、人生の哀歓などを浮かび上がらせようとはしなかった。一九三五年版の「序」で、執筆に当たってはスティーヴンソン、チェスタートンを読み返したと述べているように、この作品では人間の内奥にひそむ悪、獣性、狂気がテーマになっている。

ヨーロッパの小説は本来モラリスティックなところがあり、それは中世の説話文学から宮廷風騎士道物語を経て、十九世紀のリアリズム小説にいたるまで受け継がれてきた。その流れを汲む小説にノーを突きつけたのが、たとえばロートレアモンの『マルドロールの歌』である。ロートレアモンとはまったく違った視点に立ってはいるが、ボルヘスもまたリアリスティックな仕掛けを施したうえで、人を殺すことをなんとも思っていない奴隷商人やガンマン、凶暴としか言いようのない暴力的な人間、詐欺師、海賊といった悪人たちを登場させて、人間の内部に潜む悪、獣性、狂気を描き出しているが、彼らを通してモラルを説こうとしてはいない。この作品には、都会の小市民も農民も、上流階級の人々も登場してこない。出てくるのは残忍で極悪非道な人物たちばかりである。

その描写もまたすさまじい。たとえば、「恐怖の救済者 ラザルス・モレル」を取り上げてみると、彼は馬泥棒から悪事をはじめ、やがて千人もの手下を使って奴隷を不正に売買するようになり、さらに自分たちの不正がばれないよう秘密裏に黒人奴隷を始末していた。しかし、そんなモレルにも年貢のおさめどきが来て官憲に逮捕されそうになるが、追手の眼をくらまして徒歩で逃れる。たまたま小川で馬に乗った男を見掛け、銃で男の頭を撃ち抜くと、はらわたを引き出して死体を川に沈めて馬に乗って逃れる。彼はついに官憲につかまることなく逃走し、その後偽名で入院していた病院で肺炎がもとで亡くなるのだが、このストーリーからはなんらモラリスティックなメッセージを読み取ることができない。

「不正調達者 モンク・イーストマン」でもやはり同じようなストーリーが語られる。猪首でがっしりした体型のモンク・イーストマンは、その荒っぽい気性と腕っ節を生かしてギャングのボスにのし上がっていく。悪事の限りを尽くして、一時はボスとして君臨するが、第一次大戦のときに兵役に取りられ、ヨーロッパの戦場で戦功を上げる。戦場から帰国した後の末路は次のように記されている。「一九二〇年のクリスマスの明け方、モンク・イーストマンの死体がニュー・ヨークのとある下町の通りで発見された。五つの弾丸による傷を受けていた。幸福にもその死に気がつかず、一匹のうす汚い猫が、途方にくれて死体のまわりをうろついていた」。この記述からもモラリストとしての作者のメッセージを汲み取ることはできない。

この荒事を得意とするイーストマンらしいエピソードをひとつ紹介しておこう。

一八九九年以後のイーストマンは、その名を知られたばかりではない。選挙期間中は重要な選挙をまかされていたし、縄張りの中の売春窟、賭博場、街娼、すり、泥棒から、上納金をまき上げるまでになっていた。悪徳政治家連は騒ぎをひき起こすために彼を雇った。個人またしかり。ここに掲げるの

は彼の料金表の一部である。

片耳切り落とし	十五ドル
脚折り	十九ドル
脚ぶち抜き	二十五ドル
刺し	二十五ドル
大仕事	一〇〇ドル以上

人を傷つけ、痛めつけるのに料金表があったというのだから驚きである。いくらリアリスティックな作品だといっても、通常ここまでの描写は考えられないが、ボルヘスはここで伝記、つまりノン・フィクションの技法を取り入れて、より鮮明にイーストマンの人物像を浮かび上がらせている。

『汚辱の世界史』には、上記のほかに遺産を狙って詐欺を働くが、裏から知恵をつけてくれる人物がいなくなったとたんに人が変わったように改心するトム・カストロ、無邪気な殺人鬼ビル・ハリガン、大勢の海賊を束ね指揮した鄭夫人、正体を隠した赤穂浪士に殺される吉良上野介、死ぬ瞬間まで素顔を明かさなかった仮面の預言者ハキム、こうした人物たちの伝記とエピソードが語られている。随所にボルヘスらしい博識と着想がうかがえるものの、全体としては伝記、あるいはノン・フィクション風の文体でつづられており、しかも末尾に「文献資料」が付けられているので、この作品が作者の空想から生まれたフィクショナルな作品ではなく、あくまでもリアリズムの規範に従って書かれたものであるかのような印象を受ける。

問題はその内容である。ラザルス・モレルから仮面の預言者ハキムにいたる短編の主人公たちは、ほとんどがその行動、所業においてリアリズム小説や短編の枠から大きくはみだしている。通常、リアリスティックな作品や心理小説に上記のような人物が登場してくることはまずありえない。社会にはさまざまな階層があり、そこで人々は日々の暮らしを営んでいる。われわれ

は市民として、生活者としての感覚で作中人物の生き様やエピソードに共感、共鳴したり、反発したりするが、そこには人物たちや彼らの置かれた状況、その心理の動きを理解しようとする意識が働いている。しかし、『汚辱の世界史』に登場する人物や彼らの生きる暴力的な世界は一切の理解や共鳴、共感を拒んでいる。つまり、彼らは物そのものと同じで、読者が彼らと同化したり、理解することを拒絶している。にもかかわらず、彼らはわれわれと同じようにかつてこの世界に生きていた。だから、伝記、もしくはノン・フィクションというリアリスティックなスタイルで描くことが可能なのだが、作中人物たちはその生き様、行動からリアリズムの規範から大きくはみ出しており、人間的な共感を呼ぶような伝記という枠組みに収めること自体に無理がある。実を言えば、ボルヘスの意図はそこにあった。つまり、枠組みをリアリズムで固め、末尾に「文献資料」を付けてその点をさらに強調する。その上で、破天荒な人物たちの伝記、生き様を描くことでリアリズムの枠組みを破壊するというのが、ボルヘスの狙いだったのだ。つまり、彼は、ビオイ＝カサーレスの言う「もっぱら行動と情熱からなる共有の世界を増殖させることに腐心している」文学に対してノーを突きつけ、「単純な現実にとっぴりひたっている読者」を目覚めさせようと考えていたのだ。

『ボルヘス伝』⁽⁴⁾の著者ジェイムズ・ウッダルによると、《クリティカ》誌に発表した短編を一冊にまとめるに当たってボルヘスは新たに一編を書き足した。それが「動機なしの殺人者 ビル・ハリガン」だとのことである。そういえばこの短編は『汚辱の世界史』の中にあって他の作品と少し違ったところがあるが、それについては後で触れることにしよう。「動機なしの殺人者 ビル・ハリガン」のストーリーを見ていくと、おやっ、と思う箇所がある。そのひとつが「不眠症ですさまじく眼が冴える時は、人を多勢集めてどんちゃん騒ぎをし……」という一節で、実を言うところこの作品を書いていたとき、ボルヘス自身も極度の不眠症に悩まされていた。また、一九五四年版の「序」を見ると、「これを書いた男は、当時少しく不幸であった。しかしこれ

を書くことによってまぎらすことができた」という一文が見える。当時ボルヘスはインフレのせいで父親の年金だけでは生活ができず、経済的にかなり逼迫していた上に、激しい不眠症にかかっており、ほかにもいろいろ悩みがあり、ロドリーゲス・モネガル⁽⁵⁾やバルナタン⁽⁶⁾によれば、そうしたことが原因で自殺を試みたほどであった。そこから考えると、新たに書き足したと言われるビル・ハリガン（ビリー・ザ・キッド）を取り上げたこの作品には、ボルヘス自身の影がこっそり投影されているのではないかと考えられる。つまり、相手かまわず銃をぶっ放す無鉄砲なビルのように、ボルヘスもまた若い頃ヨーロッパの前衛主義の影響を受けて既成の文学を攻撃、否定し、新しい文学の創造を提唱した。そして、不眠症に悩まされている中、『汚辱の世界史』を通してリアリズム文学に戦いを挑んだわけだが、その無謀な試みはささいなことでも銃をぶっ放すビルを彷彿させる。ハリウッド映画が大好きで、映画時評まで書いているボルヘスは、どこかで自分をビル・ハリガンに重ね合わせていた。そして、銃弾に換えて、これらの短編をアルゼンチンのリアリズムを信奉している文壇と読者に向けて放ったのだが、そのとき彼はいつかパット・ギャレットが現れて、自分は撃ち殺されるだろうと考えていたにちがいない。先に引用した文章の、自分の不幸をこれで紛らすことができたという一文には、そうしたボルヘスらしい思い入れと遊び心が秘められているのではあるまいか、と考えられる。

『汚辱の世界史』にはもうひとつ見落とすことのできない特徴がある。ロドリーゲス・モネガルによれば、「文献資料」に挙げられている著作のうち、ドイツ語の文献の著者 Alexander Schulz は、ボルヘスの友人 Alejandro Xul-Solar をもじったもので、著者はもちろん、著作も架空のものだとのことである。他の文献についても、そこからアイデアを得ただけで、それをもとに大胆かつ自在に変更や改変を加えて書き直しているという。中でも、「真とは思えぬ詐欺師 トム・カストロ」に関しては実に奇妙な改変が加えられている。というのも、ボルヘスが参照したという『ブリタニカ百科事典』

(第十一版、一九一〇年)によると、ボルヘスの短編で重要な役割を担っている黒人の召使ボーグルに関してはわずか一行しか言及されていない。そもそも船の遭難事故で亡くなったロジャ・チャールズ・ティチボーンに成りすまして、母親から遺産をくすねようとしてあのような詐欺を思いついたのはトム・カストロことアーサー・オートンで、そのときにオートンはボーグルに命じてティチボーン家のことを調べさせただけで、それ以外にボーグルはこれといった働きを何ひとつしていないというのである。ところが、ボルヘスの作品ではボーグルがあのような詐欺を思いつき、陰でオートンを操っていたことになっている。その後、ボーグルが交通事故で亡くなるが、とたんにオートンはただの木偶になり果て、詐欺罪で逮捕されたあと、懲役十四年の刑を言い渡される。刑務所では模範囚になり、四年の減刑をもらい、出所後は無実を訴え、前非を悔いたとボルヘスの短編には記されている。

これが事実にもとづいているならともかく、ボルヘスがわざわざ大きな改変を加えてこのようなストーリーにしたというのは、何を意味しているのだろうか。ボーグルの死後のオートンの変身ぶりがあまりにも劇的で、その愚かしさだけが目立つようになっているのがなんとも奇妙である。なぜオートンがボーグルの単なる操り人形でしかないような人物に変えられたのか理解しがたい。ここで他の人物たちを見ると、ビル・ハリガンを除いて、すべての人物にある共通点のあることに思い当たる。たとえば、ラザルス・モレルに関しては、「アメリカの雑誌にのっているモレルの銀板写真は本物ではない。これほど記憶にあたいする有名な男の本ものの肖像がないということは、偶然ではありえない……」という記述があり、女海賊鄭夫人については「彼女はとろんとした眼の、なよなよした女で、笑うと虫歯だらけ、油をぬった黒髪は、眼にない艶をおびていた」と、これもどこといって特徴のない描写がなされている。モンク・イーストマンは千二百人の手下を従えて、ニュー・ヨークの暗黒街を支配したボスとして知られる。彼には、エドワード・デラニー、ウィリアム・デラニー、ジョゼフ・マーヴィンなどの偽名があったが、

「これらの数々の偽名にも、……彼の本名……ははっていない」とあり、「吉良上野介」では主人公は大石内蔵助で、彼は京都で悪所、賭場、茶屋で放蕩三昧の日を送るが、それもこれも主君の仇討ちのために敵の目を欺くのが目的で、そのために正体を隠したのだ。「仮面の染物師 メルヴのハキム」では、主人公は仮面、もしくは覆面で自分の顔を隠して、死の直前までその顔を誰も見るができなかったと語られている。

つまり、どの人物にも何かが欠けているのである。ある男は写真がなく、別の男は本当の名前が分からない。あるいは、これといった特徴のないものもいれば、顔を見ることのできない人物、真の意図を隠しきった人物もいるという具合なのだ。ここまでくれば、もはやボルヘスの筆になるオートンがなぜあのような人物として描かれているのかについてくださしい説明は不要だろう。『ブリタニカ百科事典』で語られている内容を書き換えて主客を入れ替え、ボーグルを影の黒幕にし、オートンをその操り人形に仕立て上げたのは、オートンからアイデンティティを、個性を奪い取るためにほかならなかった。ビル・ハリガンを除いて、そのほかの人物が一人残らず写真、名前、顔、正体が不明なのは、オートンに個性がない、自分というものが無いというのと同じことなのだ。「吉良上野介」も主人公は大石内蔵助である。ボルヘスは四十七士の討ち入りまでの苦労や本懐を遂げた後の彼らの人間的な姿には見向きもしない。ある薩摩藩士が、京都で遊蕩三昧の生活にふけている内蔵助を見て、激怒し、足蹴にした上、唾を吐きかけたが、その後内蔵助が本懐を遂げて切腹したと聞き、その墓前で腹を搔き切ったというエピソードを末尾においているのも、内蔵助が主君のあだ討ちを忘れたふりをして、別人になりきっていたという点を強調するためである。伝記や百科事典の記述をもとに、ボルヘスが「他人の物語を……偽造し歪曲^{わいきよく}して楽しん」だのは、そこからアイデンティティ、個性を持たない人物、すなわち《誰でもない人間》を創造するためにほかならなかった。

近代小説は『ドン・キホーテ』に始まるといわれるが、その約五十年前に

『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』と題された短い小説がスペインで出版されている。貧しい粉屋のせがれが、怪しげな生業をしている盲人に引き取られて、数々の辛酸をなめながらたくましく、けなげに生き抜いていく姿を描いた傑作だが、この作品が以後ヨーロッパ全土に広まることになるピカレスク小説の嚆矢になる。騎士道物語をパロディ化して、そのジャンルの息の根を止めた『ドン・キホーテ』と『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』は近代小説のさきがけとなる作品だが、この二作は共に個性豊かな人物像によって、それまでの類型化したヒーローである主人公と一線を画している。そして、この二作を機に、近代小説のアンチ・ヒーローの時代がはじまる。以後、ドン・パブロス、グスマン・デ・アルファラーチェ、トム・ジョーンズ、トリストラム・シャンデイ、ジュリアン・ソレル、ゴリオ爺さん、ヴォートラン、デイヴィッド・コパフィールド、ベッキー・シャープ、エイハブ船長、マダム・ボヴァリー、ドリアン・グレイといったような個性的な人物が次々に生まれてくる。近代小説に登場する人物たちの名前と顔、つまり個性を決定的な形で消し去ったのはおそらくカフカだろう。『城』に登場するKに象徴されるように、カフカの作品に登場する人物たちは出口のない閉塞的な状況のもとで苦悩し、彷徨する。『汚辱の世界史』のボルヘスは当時はまだ「バベルの図書館」のようなカフカ的狀況を作り出していないが、人物から顔と名前を、すなわち個性を消し去っている。つまり、ボルヘスは伝記のスタイルを用い、末尾に「文献資料」を付けて、リアリスティックな体裁を整えた上で、存在そのものが現実離れした悪人たちの行為を記述し、さらに彼らの個性を消し去るというなんとも手の込んだやり方でリアリズム批判をしているのである。

この作品ではまだボルヘスらしい独自の世界が構築されていないが、それでもその萌芽とも言える特徴が随所にうかがえる。たとえば、ラザルス・モレル、モンク・イーストマン、トム・カストロを見ると、その後の短編に描かれることになるアルゼンチンのならず者の前身ともいえるべき人物として描

かされている。ボルヘスはハリウッド映画，とりわけスタンバーグのギャング映画がお気に入りであり、映画時評まで書いている。それらの映画時評を一冊の本にまとめたエドガルド・コサリンスキーが、面白いエピソードを紹介している。彼によると、ボルヘスは、スタンバーグの初期の映画でシカゴのギャングたちが勇敢に死んでいくのを見て、涙にかきくれていたとのことである。ボルヘスはシャルボニエとの対談の中で、犯罪者やならず者について次のように述べている。

「ええ、将軍の場合はともかく、一般の兵士の場合はそうでしょうね。犯罪者やならずものの場合についても同じです。恐らく、かなり単純な人間であることが必要でしょう。わたしは、非常に危険のともなう暮らしをしていた人びとを知っています。それは単純な人びとでした。彼らと話してみると、その話はとりたてて面白くもありませんでした。……わたしは彼らのなかに何も見出せませんでした。つまり彼ら自身、一度も自己分析などしたことがない。そういった類のことについては話さなかったのです。誰かを殺したとか、およそ馬鹿げた喧嘩で命を落としかけたとか、こういうことをすべて、彼らは特に意味があるとは思っていなかったのです。⁽⁶⁾

ボルヘスはおそらく、単純な人間であるギャングたちが勇敢に、そして実にあっけなく死んでいく姿のうちに、抗いがたい運命の力の働きを読み取り、人がそれに動かされて逃れようもなく死へと向かっていく姿に打たれたにちがいないし、そこにボルヘスの死へのこだわりを読み取ることができるだろう。

人間というのは自らの意志で行動しているように見えて、その実より強い別の力にもてあそばれているのではあるまいか、そうした考えがボルヘスの作品から読み取れるように思うのはぼく一人ではないはずである。それを象徴的に物語っているのがトム・カストロを陰で操っていた黒人の召使ボーグ

ルである。ボルヘスが実話を大胆に書き換えて、ボーグルをあのような人物に仕立て上げたのは、まさにべつの力がどこかで働いているということを伝えるためにほかならなかった。このテーマはその後、「死んだ男」で繰り返され、「円環の廢墟」では超越者の存在が暗示されていて、より複雑で神秘的な形で展開されることになる。

「仮面の預言者 メルヴのハキム」を見ると、鏡がおぞましいものとして何度も言及されている。たとえば、「われわれの住む世界はひとつの誤謬、不遜なパロディーである。鏡と父性とは、パロディーを増殖し確認するが故に忌むべきである」という一文が作中に出てくるが、これとよく似た文章が『伝奇集』（8）の「トレーン、ウクバル、オルビス・テルティウス」の中に見られる。ウクバルの教祖の一人が言った「鏡と交接は人間の数を増殖させるがゆえにいとわしい」という言葉がそれだが、この引用に先立つ所で、「私がウクバルを発見したのは、一枚の鏡とある百科事典が結びついたおかげである」という意味深長な言葉が出てくる。この言葉には、《トレーン》にまつわる物語のはじまりであると同時に、鏡によって増幅された世界の物語が始まるという意味も込められている。大勢の人間が関わって作り上げた架空の世界《トレーン》に関する百科辞典は、この世界の写し絵なのだが、それは鏡像としての写し絵にほかならない。つまり、そっくり同じなのだが、左右が逆になった、逆転した世界なのである。そこではわれわれの生きる世界がことごとく裏返しにされている。たとえば、原因と結果をつなぐ因果律は否定され、哲学は幻想文学の一部門でしかなく、すべての本はたった一人の人によって書かれている、といった具合である。この裏返しになった世界が百科辞典の中にとどまっていれば問題はないが、この短編の末尾でトレーンの磁石や円錐形の金属が発見され、さらに学校の教育現場にまで及んでいるという記述を見て、読者は足元の地面が揺らぐような不安を感じる。それこそがメルヴのハキムが予言した不吉な世界にほかならない。

ここまで見てきたように、『汚辱の世界史』にはリアリズム批判を通して

の新しい文学的創造，文献資料の扱い方，社会の枠組みからはみ出した人物たちを通しての《誰でもない人間》の創造，鏡へのこだわりなど，やがてボルヘスの作品の中で展開されることになる重要なテーマがすでに現れている。中でも，人物たちの個性を消し去ることで彼らを《誰でもない人間》に仕立て上げている点が注目される。《誰か》であること，つまりドン・キホーテであるということは，彼がラサリーリヨでも，トム・ジョーンズでもなければ，マダム・ボヴァリーでもないということである。したがって，ボルヘスの描く悪党たちが《誰でもない》人間だということは，すべての人間，つまりぼくたちでもありうるということになる。その考えをさらに発展させれば，「すべての人間は交接の目くるめく瞬間において同一の人間である。シェイクスピアの詩の一行を繰り返すすべての人間は，ウィリアム・シェイクスピアその人である」という考えにつながっていく。そして，そこに時間の観念を持ち込んで，無限の時間を設定すれば，フラミニウス・ルフィウス，ヨセフ・カルタフィリウス，すなわち《不死の人》が生まれてくるはずである。

『汚辱の世界史』は新しい文学の創造を目指していたボルヘスの習作的な作品といえるが，そこには以後の作品で花開くことになるボルヘス的世界の萌芽，とりわけ死へのこだわりが見られることを見落としてはならないだろう。

注 参考および引用文献

- (1) 『汚辱の世界史』 Jorge Luis Borges. Obras completas I: Emecé Editores 1989 の訳文は『集英社ギャラリー[世界の文学] 19, ラテンアメリカ』（集英社，1990）に収められている篠田一士のものを使わせていただいた。
- (2) ジョルジュ・シャルボニエ『ボルヘスとの対話』 p115. 鼓直+野谷文昭訳。国書刊行会，1978.
- (3) Bioy Casares, Adolfo; El jardín de senderos que se bifurcan. (“Jorge Luis Borges”, edición de Jaime Alazraki, Taurus Ediciones, 1976.) p.56.
- (4) ジェイムズ・ウッダール『ボルヘス伝』平野幸彦訳，pp.162-163. 白水社，2002.
- (5) Rodríguez Monegal, Emir: Borges, una biografía literaria; p. 51.

México, Fondo de Cultura Económica, 1978.

- (6) Barnatán, Marcos-Ricardo: Borges, biografía total. pp.291-292.
Ediciones Temas de Hoy,1995.
- (7) 同上. pp.111-112.
- (8) 以下の「トレーン, ウクバール, オルビス・テルティウス」の訳は, Jorge Luis Borges. Obras completas I: Emecé Editores 1989 に収められている
“Ficciones” からのものである。